

絶やさない！漁業を繋ぐ赤須賀の心意気 ～ハマグリ復活による地域の活性化～

赤須賀漁業協同組合青壮年部研究会
秋田 健一

1. 地域の概要

赤須賀は、伊勢湾の最奥部、大都市名古屋から電車で20分の場所に位置する、450年前から続く漁村である(図1)。木曾三川河口の豊かな漁場で育まれたハマグリは、東海道の桑名宿の名物として名高く、江戸時代には、将軍家にも献上されていた。

湾奥の限られた漁場で漁業を継続し続けていくために、資源を守り、環境に感謝する気持ちは、脈々と引き継がれ、現在も赤須賀に息づいている。



図1 赤須賀の位置

2. 漁業の概要

赤須賀漁業協同組合の組合員数は現在 115 名で、その大半が漁業を専業としている。主な漁業はシジミ、ハマグリ、アサリを漁獲する底びき網漁業であり、このほか黒ノリ養殖とシラウオ船びき網が営まれている。

平成 24 年度 (H24. 5. 1～25. 4. 30) の生産金額は、貝類が 7 億 9, 000 万円で全体の約 9 割以上を占めている。このほか、黒ノリが 1, 900 万円、シラウオが 700 万円となっている。

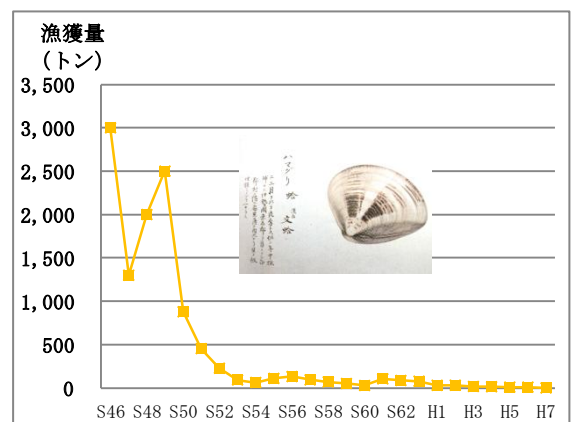


図2 ハマグリ資源量の減少

3. 研究グループの組織と運営

赤須賀地区の漁業の象徴であるハマグリは、高度経済成長期の埋め立てや地盤沈下による干潟の消失に伴い、昭和 50 年頃から激減した (図 2)。

赤須賀漁協青壮年部研究会は、このハマグリ資源を復活させるために昭和 51 年に結成され、これまで、ハマグリ種苗生産をはじめ、黒のり養殖技術改良試験、シジミ天然採苗試験、シラウオ人工ふ化試験、漁場環境調査、資源量調査など、漁業を次世代に繋ぐための様々な研究活動に取り組んできた。現在は、28 名の会員で運営されており、赤須賀の漁業の継続・発展を目的として、①将来にわたり漁業を営んでいけるよう、それぞれが自覚を持って取り組むこと、②環境保全の必要性や自然の恵みの素晴らしさを広く知ってもらい、市民との絆を深めること、をモットーに活動に取り組んでいる。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

一度は絶えてしまいそうになった赤須賀のハマグリであったが、研究会が種苗生産技術を確立し、これまでに約3,000万個の稚貝放流を行ってきたことや、漁協全体で厳しい漁獲規制に取り組んできたことに加え、平成5、6年に40ヘクタールの人工干潟が造成されたことが追い風となり、平成24年には年間188トン、2億4,000万円までに水揚げが回復した(図3)。

ハマグリ復活で収入の安定が図られたことにより、かつては漁業の先行きが見えなかったため、後を継げなかった漁師の子や孫が赤須賀に帰ってきて、平成17年以降、30人が漁師になった。研究会のメンバーも20代や30代の若手が増えて、様々な活動に取り組める体制が整った(図4、5)。

私達は、先輩達で復活したハマグリ資源を守ることであり、赤須賀の漁業を継続し、次の世代にきちんと繋いでいくための取り組みを実践することが、ここに戻り、これからを担っていく私達の使命であると考えた。

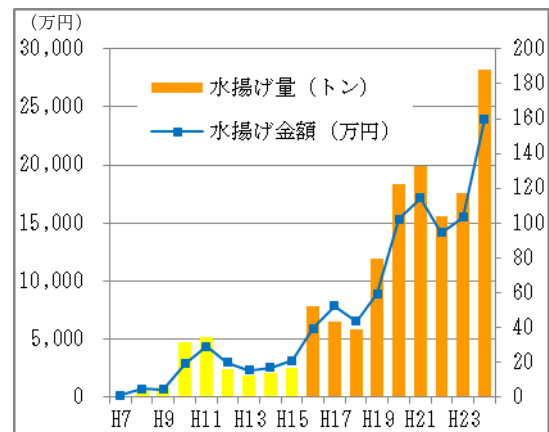


図3 復活したハマグリ

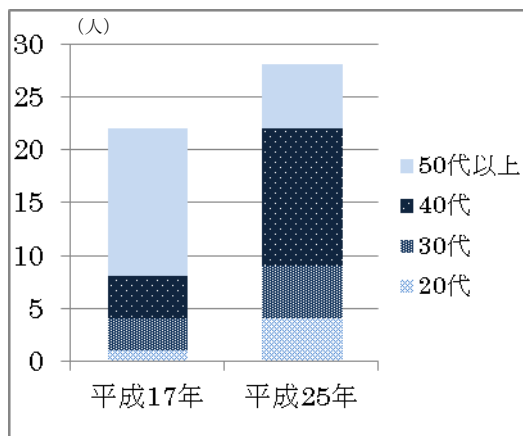


図4 青壮年部研究会の年齢構成



図5 研究会メンバー

5. 研究・実践活動状況及び成果

(1) ハマグリ資源を守る活動状況及び成果

1) 干潟のモニタリング調査

復活したハマグリ資源管理の基礎データとするために、平成21年から干潟のモニタリング調査を行っている(図6)。調査項目は、貝類の生息状況、粒度組成、強熱減量で、年2回、23地点で実施している。

表1に、秋の調査における10mm以下のハマグリ稚貝(0歳)の分布状況を示した。この結果、平成21年と25年に稚貝が多く発生していることがわかった。また、それ以外の年も、ハマグリが少なかった頃と比較して、10倍以上の分布があり、ハマグリが安定して発生していることが明らかになった。

休日返上で暑い干潟を歩き回り、慣れない調査・分析を行うのは楽ではないが、稚貝が育っているのを自分の目で確認するのは、大変うれしい。稚貝の発生状況を把握し、日々の漁獲データと合わせて、注意深く見守って行かなければならない。



図 6 貝類の計測

表 1 ハマグリ稚貝の分布状況

調査年	H21年	H22年	H23年	H24年	H25年
1㎡あたりの の個体数	42.0個	1.33個	7.33個	3.33個	86.0個

2) ハマグリを密漁対策

復活したハマグリを狙った密漁が、平成 17 年ごろから目立つようになってきた。密漁のピーク時の平成 21 年には、春・秋の大潮時には、1 日に数千人も“密漁者”が干潟でハマグリを採捕した。ちなみにここで言う“密漁者”には、ハマグリを採捕していく一般市民も含まれている。自覚のない家族連れの潮干狩りの者から、注意しても聞かない悪質な者まで、様々なレベルの密漁者がやってくるが、仮に一人あたり 3 kg の採捕としても、1,000 人が採れば 3 トンとなり、資源に与える悪影響は計り知れない。

これらの密漁者からハマグリ資源を守るために、パトロールを実施している(図 7)。パトロールは、潮干狩りが盛んとなる春を中心に年間 20 日程度行っており、研究会のメンバーが総出で、注意喚起の幟を立てたり、密漁者にチラシを配布し、漁業権が設定されていることやハマグリ復活に私達が長年取り組んでいることを地道に説明している。説明に対し、なかなか話を聞いてもらえないことや、いろいろな意見をいただくことも多々あるが、粘り強く取り組んでいる。

これらの活動の結果、密漁者は、ピーク時と比較して、着実に減ってきている。また最近では、嬉しいことに市民(商工会議所等の若手メンバー)もパトロールに協力してくれるようになってきた(図 8)。

3) ハマグリや漁業のことを市民に伝える活動

私達が守っているハマグリを密漁者が採っていくことで、せっかく復活したハマグリ



図 7 干潟での密漁パトロール



図 8 市民の協力も得て実施

資源が悪化し、漁業ができなくなってしまう可能性もある。いちごっこのような活動を続ける中で、ハマグリを守るためには、パトロールを行うだけではなく、ハマグリのことや、それを復活させた漁業者の努力などを市民に理解してもらう必要があると痛感し、ハマグリや漁業のことを市民に伝える活動に重点的に取り組んでいる。活動においては、市民と漁師が顔を合わせる事が大切だと考えており、できる限り赤須賀に来てもらい、赤須賀の漁業や環境を体験して頂いている。なお、特に力を入れているのは、以下の2つの活動である。



図9 小学生との干潟観察会

① 子供達に伝える

小学生達を対象とした活動では、子供達にできるだけ楽しんでもらい、漁業に興味を持ってもらうことを心がけている。現在、ハマグリの種苗放流、干潟の観察会(図9)、操業見学、社会見学の受け入れなどを行っており、平成21年度～25年度の5年間で、のべ100校、4,911人に対して実施した(表2)。

表2 社会見学の受け入れ実績

実績	H21年	H22年	H23年	H24年	H25年	合計
学校数	17校	20校	19校	22校	22校	100校
生徒数	798	977	930	1,233	973	4,911

来てもらう限りは、可能な限り体感してもらいたいとの思いから、種苗放流や干潟観察会などはもちろんのこと、社会見学で来た子供達にも、実際に貝を捕るところを見せたり、漁具に触らせたり(図10)するように心がけている。その甲斐あってか、子供達から送られてきた作文には、「はまぐりの赤ちゃんがかわいかったです。」「漁師さんが工夫や努力をしてきたと聞いたので、これからは干潟を大切にしていきたい」「ハマグリの住みやすい海にして欲しい」などの嬉しい感想がたくさん見られる(図11)。また、近年では体験後の学習発表会に招待してくれる地元の小学校もいくつか出てきており、私達との良いつながりができつつある。



図10 漁具に触れてもらう

子供達からの時には予想外の質問に答えるのは楽しいし、ハマグリや環境のことをわかりやすく説明できるようにすることは、私達にとっても良い勉強になっている。

これらの体験が良い思い出として残り、このことから、将来赤須賀を応援してくれる人が一人でも多く



図11 お礼の作文

出てくれることを願っている。

② ハマグリの美味しさを伝える

ハマグリのことを好きになってもらうためには、味を知ってもらうのが欠かせないと考え、ハマグリの美味しさを伝えることにも力を入れている。イベントでのハマグリの販売(図12)や、親子料理教室などを行うとともに、漁場見学や干潟観察会などの際に焼きハマグリなどを味わってもらっている。桑名でも地元のハマグリの味を知らない市民がたくさんいるので、顔を合わせて話をしながら、ハマグリのうんちくや料理法を伝え、美味しさを知ってもらっている。また、こうした際には、ハマグリを守る取り組みや環境の素晴らしさ、赤須賀地区の情報を伝えることも欠かさず行っている。

また、焼きハマグリや吸い物以外の、家庭で手軽にできるおいしい食べ方を知ってもらいたいとの考えから、ハマグリを使ったレシピの開発も行っている。ハマグリフライ丼(図13)は、私達が考案したメニューで、完成した時に、地区の人や行政、マスコミ関係者などを招いてお披露目会を行ったところ、評判となり、はまぐりプラザ(後述)の食堂のメニューにも採用された。フライの上には、地元の家庭で貝の佃煮を作る際のタレ「時雨だまり」がかかっており、口に入れると、ハマグリそのものの上品な甘さが広がる逸品である。



図12 イベントでの販売



図13 ハマグリフライ丼

6. 波及効果

(1) 密漁対策への波及

私達の働きかけの結果、ハマグリを守る活動に共鳴してくれた、商工会議所青年部や商店街連合会の若手メンバーが、密漁パトロールに協力してくれるようになった。彼らはイベントなどの際に、密漁撲滅のPRも行ってくれており、今後も一緒に取り組みの輪を広げて行きたい。

また、平成24年3月に、関係漁業協同組合、漁連、警察、海上保安部、県、市町、などからなる桑名地区密漁防止対策協議会が設立された。私達も協議の場に参加し、少しでも効果的な対策が行えるよう、現場の生の状況を伝えるとともに、合同パトロール(図14)で密漁防止を強く訴えている。



図14 合同パトロール

(2) 学校教育への波及

平成 23 年度から、桑名市の小学校 3・4 年生の社会の副読本に、赤須賀のハマグリ漁のことが取り上げられるようになった (図 15)。これは、赤須賀に興味を持った先生の尽力で完成したもので、赤須賀のハマグリを守る想いが伝わった成果の一つであると考えている。また、赤須賀を訪れる学校は年間 20 校を超えており、そのほとんどがリピーターである。



図 15 社会の副読本

(3) はまぐりプラザからの発信

平成 22 年に、はまぐりプラザという漁業交流センターと公民館を兼ねた施設が、赤須賀地区に完成し (図 16)、地区住民からなる N P O が運営を行っている。この中の

食堂「はまかぜ」では地元のハマグリを使った料理を提供しており、ハマグリ関連メニューを年間 2, 200 万円売り上げており (表 3)、私達の考案した「ハマグリフライ丼」もこのメニューとして採用されている。また、展示室ではハマグリや漁業、赤須賀の漁村文化に関する展示が行われている。

この施設には、年間 2 万人以上の人々が訪れており、ハマグリ的美味しさや漁村文化を発信する重要な拠点となっている。私達もここを使ってパネル展示や学習会などを行っている。



図 16 はまぐりプラザ

表 3 「はまかぜ」売り上げ実績

はまぐりプラザ食堂 「はまかぜ」H24 年度実績	
来客数	20,252人
ハマグリ関連 売り上げ	2,200万円

7. 今後の課題や計画と問題点

(1) 密漁への対応

私達の努力の結果、ピーク時と比較すれば減少しつつあるものの、悪質な密漁者は絶えることがない。今後も理解者を増やす取り組みを行うとともに、組合や漁連、行政などの協力を仰ぎながら、パトロール活動を継続しなければならない。

(2) ハマグリや赤須賀の漁業を応援してくれる市民をさらに増やすこと

赤須賀の漁業を継続・発展させていくには、ハマグリが好きな人、赤須賀の漁業や環境に興味を持ってくれる人、いざという時に知恵を貸してくれる人など、赤須賀を応援してくれる人がまだまだ必要である。私達の手で、もっともっと増やしていきたい。

(3) 漁業を繋ぐ「赤須賀の心意気」を絶やさないこと

ハマグリ資源が復活し、収入が安定したことで、私達は赤須賀に戻ってくることができた。この資源を守り、維持していくことで、漁業が守られ、漁村赤須賀が守られる。

先人達から受け継いだ、かけがえのないふるさとを守れるのは、私達だけである。漁業を繋ぐ心意気を絶やさず、これからも活動に邁進していきたい。